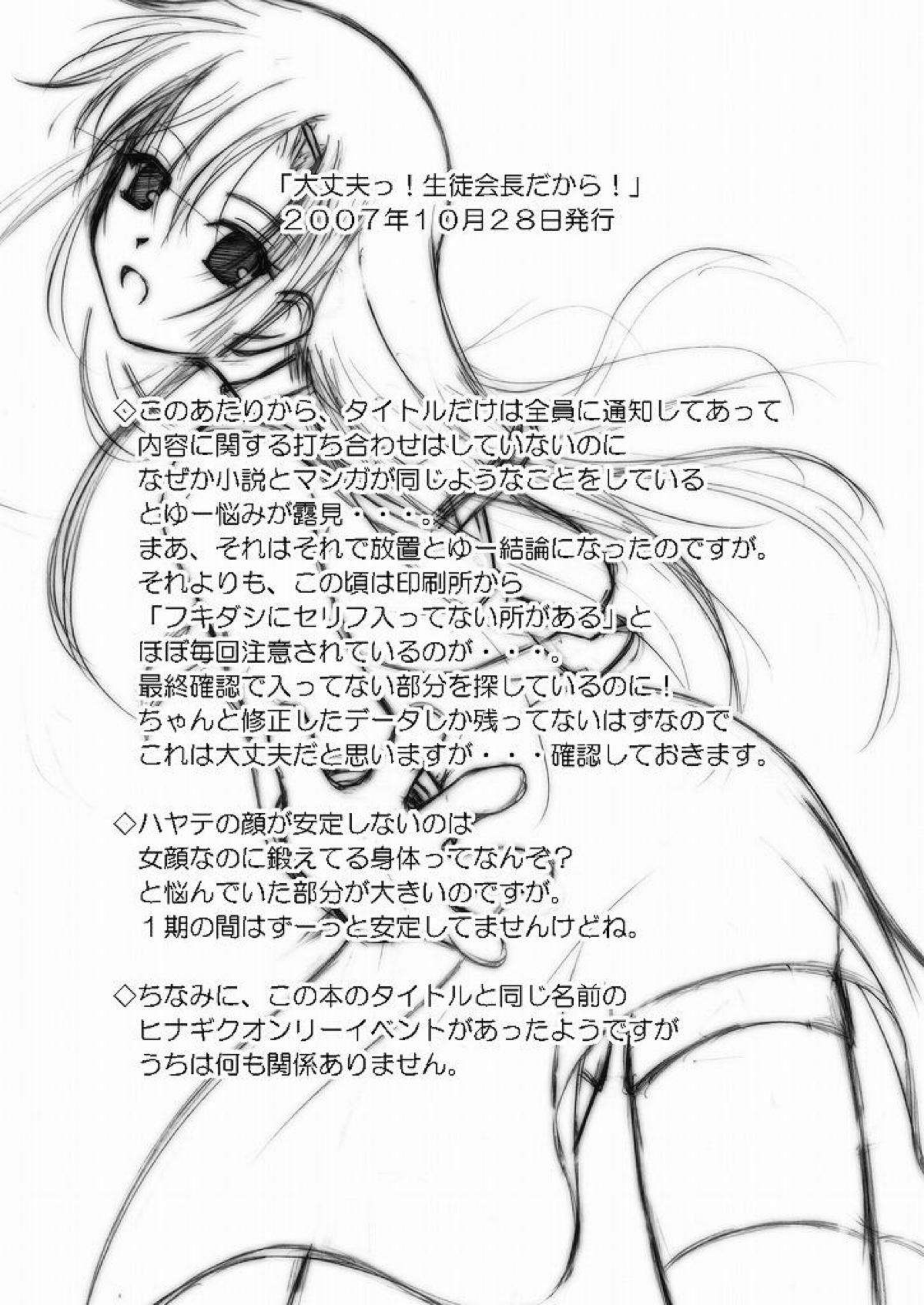


大丈夫っ!
生徒会長だから!
FOR ADULT





「大丈夫っ！生徒会長だから！」

2007年10月28日発行

◇このあたりから、タイトルだけは全員に通知してあって内容に関する打ち合わせはしていないのになぜか小説とマンガが同じようなことをしているとゆー悩みが露見……。

まあ、それはそれで放置とゆー結論になったのですが。それよりも、この頃は印刷所から「フキダシにセリフ入ってない所がある」とほぼ毎回注意されているのが……。

最終確認で入ってない部分を探しているのに！ちゃんと修正したデータしか残ってないはずなのでこれは大丈夫だと思いますが……確認しておきます。

◇ハヤテの顔が安定しないのは女顔なのに鍛えてる身体ってなんぞ？と悩んでいた部分が大きいのですが。1期の間はずーっと安定してませんけどね。

◇ちなみに、この本のタイトルと同じ名前のヒナギクオンリーイベントがあったようですがうちは何も関係ありません。





ハヤテくんっ

ん...?

あれ？
ヒナギクさん

どうしたの？
こんな時間に
学校に来るなんて



門が閉まっていたので
どうしよう...って
思ってたんですよ



ふやー

お嬢さまの
忘れ物を取りに
来たんですけど



い：
いいんですか？
勝手に
開けちゃって

通用門

はい



ほら
行くわよ

あー...



大丈夫よ

あはー

私っ
生徒会長
だから！



ヒナギクさんは
なんで
こんな時間に
学校に来てるん
ですか？

おー...
満員だ

ちよ…
ちよつと

な…
なんとなく

学校に
忘れ物とか
バレるのも
癪だわ…

生徒会室に
急な用事が…

でしたら

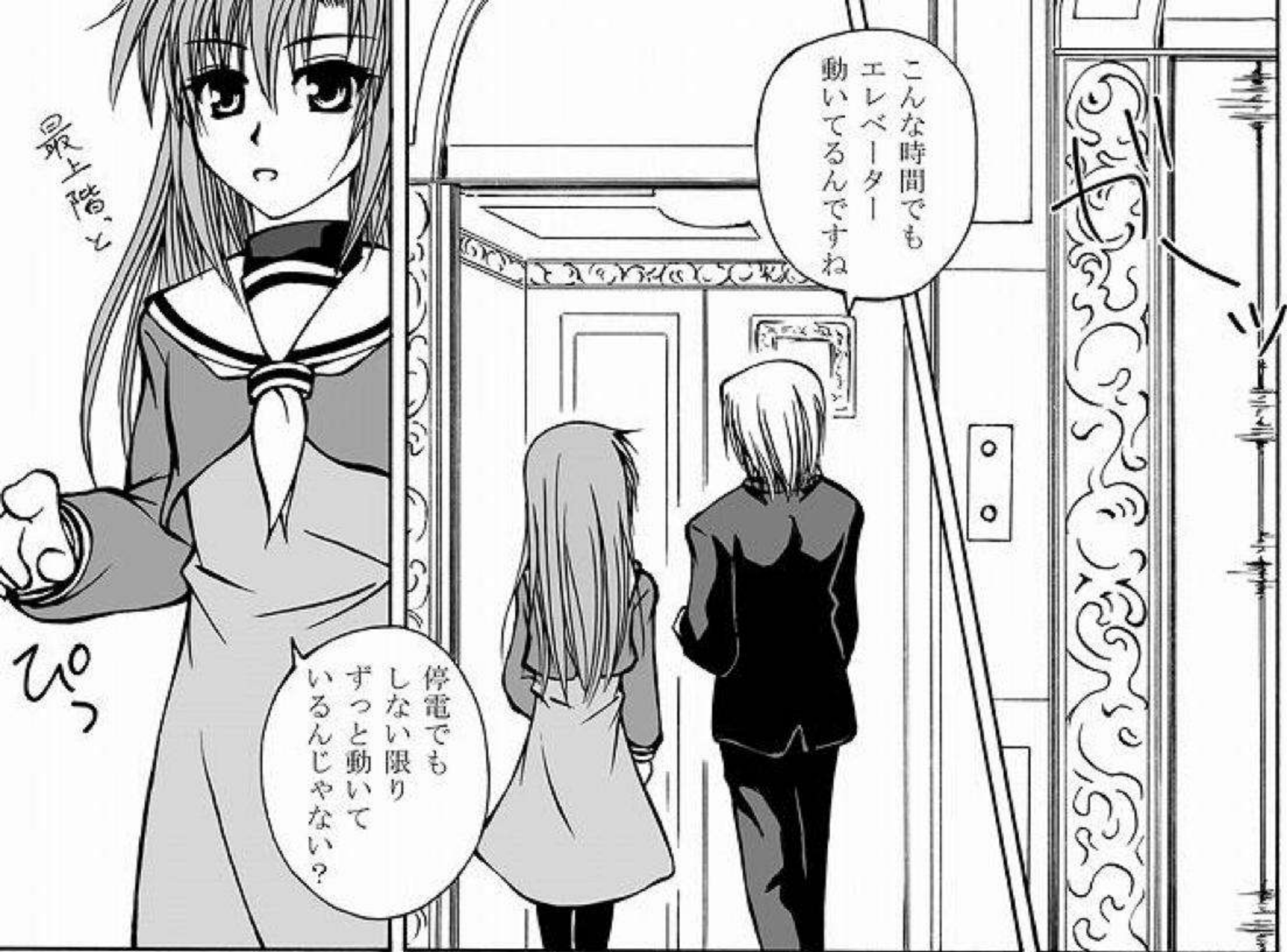
あ…

こんな
時間で少し
一緒に
行きますよ

怖いから
一緒に来て下さい
じゃなくて？

また
迷うと困るので
お願いします

じゃあ先に
ハヤテくん
の方からね







あれ？

だから
揺らさないで

ひ
ぬ

外は
見えません
ですよ。

何よっ！
知ってるでしょ！！

ヒナギクさん
怖いんですか？



あー…
ヤバイ

あうー

もっと
苛めたく
なるくらい
可愛い…

大丈夫ですよ

え？

どうやっ…

もちろん
こうやって
です！

か
か
は
は

ちよっ

怖いことなんか
忘れさせて
あげますから

は…
ハヤテくん？

忘れさせて
あげるって
ゆーのは…

たぶん
ヒナギクさんの
想像した
通りですよ

そんなに
したいなら
生徒会室でも
してあげますよ

あ…
う…

ちよ…
ハヤテくん

だめえ

せめて
生徒会室に
着いてからとかじゃ
ダメなのかなー？

↑焦って変なことを
口走っている自覚がない



んっ

は...
ハヤテくん

やあっ!

...

そんな事したら
ダメですよ
ヒナギクさん

まっ

抵抗して動くと
このエレベーター
揺れますから

ハヤテくん
ずるい…よ

ふにっ

かなり古いですし
あんまり揺らすと
落ちるかも
しれないですよ

こんな場所で
弱さを見せた
ヒナギクさんの
負けです

うっ



まだ私の
負けと決まった
訳じゃないわ！

ま...

何を言っ
てるんですか
ヒナギクさん

おっ



もう
こんなに
グチヨグチヨに
なってるのに

んっ！！

くっ

そろそろ
欲しい物が
あるんじゃない
ですか？

そ…
そんなこと
ないもん

ふあっ

じゃあ
ヒナギクさんが
おねだりするまで
おあずけですね

5/130
あ

あつ…

そ…
そんなもの
おねだりなんか
出来るわけ
ないじゃないの！

あう…っ

ダメですよ

ん…っ

びびるっ

やあつ

だだめ…

だんだん
頭が真つ白に
なってきた…

このままじゃ…

それなら
ずっと
このままですわ

そんな顔されても
ちやんと
言ってくれないと
分かりませんか？

うっ

くちゅっ

ふあ

びびるっ

は…
ハヤテくんの
く…

ああ

くださ…ら

何が
欲しいんですか？

あつ

お…
おち…

ち……ち……ん
くだ…

…い

まあ
ヒナギクさんに
しては
上出来でしょう

うーっ

ちやんと
ヒナギクさんの
欲しいモノ
あげますよ



あっ

ひあっ

あー...
 やっぱり
 揺れますね
 エレベーター

ぐわんぐわん
 びりびり

ぐわんぐわん
 びりびり

ぐわんぐわん
 びりびり

んあ……っ

じゃあ
ヒナギクさんは
このまま放置されて
いいんですか？

ゆ……
ゆらゆ……
ない……で

や……

ヒナギクさんが
決められないなら
僕がどうするか
決めますよ？

やあっ

ん……
あ……っ

あん……

ふああっ



あ……

あ……きよ……り
ゆ……ゆえ……



てゆれ……
るっ

ああ…
ヒナギクさんの
ために

もっと
激しく揺らして
あげることに
しましたから

い…

あっ

いじ…
わ…るっ

めちよっ
おっ
おっ



しゅん、

激しく
揺れてる方が
締まりも反応も
良いじゃ
ないですか

しゅん、

やっ

あん…

しゅん、

なにを
言ってるんですか
ヒナギクさん

だ…

仕方ないな…
違うので
してあげますよ



だ…だめ

だめ
な…の





おち
ちやうっ！

や...あつ

あつ

わい
わい

だめ...え

ぎやうっ

お...
おち...

お...
おち...

お……ち
ちや……うよ

ビクッ

僕がしっかり
つかんでるから
大丈夫ですよ
ヒナギクさんっ

やあ

じゃあ
僕がイッたら
降ろして
あげますよ

ほ……
ほん……とに？

ええ

でも
その代わり
動きますから
揺れますよ

だ……だ……
ぬ……
ひっ

あつ

ガリ
ガリ

だ...めえ
だめら...って

ヒクヒク

ぬ...
あ...
あ...

ああつ

あ...
あ...
あ...

あ...
あ...



ひあ...あつ

あああああ
つ !!! ああ



裕福な家の子息令嬢ばかりが通う白皇学院に、最近ある噂話が蔓延していた。

「信じないわよ、そんな話。どうせどの学校にでもある怪談のひとつでしょう？」

広大なこの学院の生徒会長を務めるヒナギクは、その噂話を振られるたびに、そう返していた。

非現実的だし、確たる証拠もない。

それに、浮ついた噂話に振り回されて校内の規律が乱れることを、生徒会長として助長するわけにもいかなかった。

学校という閉鎖的な空間において、彼らは刺激を求めているだけなのだ。怪談である必要性はない。刺激になるなら先生のゴシップでも侵入者でも、とにかく何でも構わない。それがたまたま今回の噂話だっただけのこと。

だからヒナギクは噂の信憑性をはじめから疑っていた。どうせ今回も平和に飽きた誰かが流した狂言なのではないかと、信じて疑わなかった。

いや、否定せずにはいられなかったのだ。

「ヒナギクさん？」

「ひゃあっ！」

ヒナギクは突然背後から声をかけられて、文字通り飛び上がった。

とつづくに日が暮れて、辺りは静寂に包まれている。こんな時間には人がいるとは思わなかった彼女は、心底肝の冷える思いを

学校の怪談

鷹宮 沙玖羅

した。

「ハ、ハヤテくん!!」

ばくばく大騒ぎしている心臓を宥めながら、ヒナギクは平静を装って振り返った。

そこにはいつも通りの執事服に身を包んだ三千院家の執事の姿。

「どうしたの、こんな時間に?」

真っ暗な中、かろうじて顔が判別できる距離まで近づくと、ヒナギクは動揺を押し隠して問いかけた。

「ええ、お嬢さまが珍しく登校なさったときに忘れ物をされたらしくて」

ハヤテはいつもの緊張感に欠ける笑顔で苦笑している。小脇にはA5サイズの小冊子。

ヒナギクはナギの忘れ物だというそれを見て、なぜこんな時間にハヤテに取りに行かせたのか納得した。

その冊子は、よく読めないが何かの攻略本らしい。ということとは、現在ナギはゲームの真っ最中ということになる。

「ヒナギクさんも忘れ物ですか?」

ハヤテが邪気のない様子で訊いた。

ヒナギクは笑顔のまま固まった。彼の言はもつともだ。用もないのにこんな時間に残っているほうがおかしい。

けれど、問われてヒナギクは一瞬言葉に詰まった。

「そ、そんなところね」

「どこに行くんです?」

「う……」

無邪気に問いを重ねてくる彼がいつそ憎らしい。

このタイミングでその問いかけをするなんて、わかっただけでわざとだったら、タダじゃおかないのに。

けれど彼の顔を見てみると、それはないと思えてしまうのだから、負けかもしれない。がくりと肩を落とす。

ヒナギクはしかたなく、できるだけ考えないようにしていた場所の名前を口にした。

「……生徒会室よ」

自分の声を作る言葉が、辺りの闇に不気味に吸い込まれていく。

言うてから、またどんよりと気分が重くなった。

そうだ、自分はこれから生徒会室に向かうのだ。

そしてこんなときに限って、ふだんは周りに気を遣うはずの執事は、触れて欲しくないことにピンポイントに触れてくれるのだ。それこそわざとかと疑うくらいに。

「生徒会室といえば、聞きましたよ。テラスの幽霊の噂」

ヒナギクは再びピキンと固まった。

耳を塞いでしまいたい衝動を必死に堪える。

そんな彼女の様子に気付かないハヤテはそのまま言葉を続けた。

「真夜中の0時に間違って鐘が鳴ると、時計塔のテラスに白い人影が現れるんです。つけた? そういえばそろそろ0時ですね」

ヒツとヒナギクの咽喉が鳴る。できるだけ考えないようにしていたのに、この男は!

内心張り倒してやりたい衝動に駆られるも、生徒会長としてのプライドがなんとか抑えさせる。

そうなのだ。時刻はもうすぐ噂の0時。しかもヒナギクが向かうのはまさにその現場で。

「そ、そんなことあるわけじゃないじゃない。こんな時間に人がいるわけじゃないじゃないの!」

「ですから人じゃないんじゃないですか?」

「うっ…」

ヒナギクはひるんで顔を強張らせた。

実は情けない話だが、幽霊の噂が怖くて生徒会室に近寄れなかったヒナギクである。

ふだん出入りしない場所ならば幽霊が出ようと気にしない彼女だが、場所が生徒会室のテラスとなれば話は別である。

否応なく出入りが求められる場所だけに、避けるわけにはいかないのだ。

…避けるわけにはいかないのだが、ギリギリまで避けた結果がこれである。

明日の朝までにどうしても必要な書類があつて、生徒会室に置きっぱなしの草稿を今夜中に仕上げるために、こんな時間にしぶしぶ取りに行く羽目になったのだ。

生徒会長なんだから、幽霊が怖い、なんて情けない姿をさらすわけにはいかない。

だからなんとしても今、自力で取りに行かなくてはならないのだけど…。

時計塔を見上げたヒナギクは確実に足が重くなったのを感じた。

いやだ、行きたくない。だけど生徒会長として、役目を放棄するわけにはいかない。そんなこと正義心が許さない。

自分に言い聞かせるも、ひとりて無人の生徒会室に向かうのは怖い。

彼女の目には時計塔全体が、おどろおどろしい空気に包まれているように見えてしまう。

ヒナギクは傍らの少年を見た。仕事はすでに終わっているらしい。

ナギが待っているのだろうが、少しくらい遅くなつたって構

わないだろう。

誰かについてきてもらわなくては生徒会室に行けないなんて恥ずかしいけれど、この際、背に腹は代えられないだろう。

「あの、ハヤテくん。せっかくだし生徒会室まで寄つて行かない？お茶くらい出すわよ？」

「やっ…あ、ハヤテく…ああんっ！」

ヒナギクはテラスの手すりに掴まり、尻を後ろに突き出す格好で身を硬くしていた。

脚はおぼつかなく震え、腕で支えていなくては立っていられない。

その白い脚に、銀糸が一筋伝った。

「ヒナギクさん、どうです？こうしていれば別に怖くもなんともないでしょう？」

「ひ…っ」

繋がったまま腰を揺すられて、彼女の視界が涙で歪む。

彼女のナカでハヤテが際限を知らず成長し、狭い内壁を圧迫する。

ハヤテの両手はヒナギクの胸を性急に揉み、追い上げ硬く熱れた先端を樂しげに弄っていた。摘んで引つ張ると、甘い嬌声がこぼれた。

「あいかわらずエッチな身体しているんですね。今日だって慣らしてもいないのに、いきなり後ろから挿れても平気でしたし。

白皇の生徒会長がこんな淫らな身体だと知ったら、みなさんどう思われるんでしょうね？」

「…いや…」

ヒナギクは、快樂と恐怖のため、わけがわからないままに頭を振った。

ハヤテに翻弄されて、思考能力がことごとく吸い取られていく。

「……どうしてこんなことになったんだっけ……？」

ヒナギクは鈍くなる頭を叱咤して思考を廻らした。

「えつと、たしかここに……、あったわ」

ヒナギクは生徒会長用の机の引き出しを漁ると、一枚の茶封筒を取り出した。その中にはぎっしりと紙の束が詰め込まれている。

彼女はそれをテーブルに置くと、ハヤテにソファアを勧めた。

「紅茶でいいかしら。ハヤテくんほど上手には淹れられないと思うけど、我慢してね」

言いながら、簡易キッチンに消えていこうとするヒナギクの手首をハヤテが掴んだ。

「え……？ ハヤテくん？」

振り返ったヒナギクは、ハヤテの顔を見て身を硬くした。

「ヒナギクさん、幽霊なんか怖くないようにしてさしあげましょうか？」

いつもの彼らしくない、少し傲慢そうな不敵な笑み。

普段の彼を知る者ならば驚かすにはいられないだろう。

けれど、ヒナギクにはその顔に見覚えがあった。

いつも穏やかな彼が豹変するとき——それは彼がヒナギクを抱くときだ。

その先のことを想像して、知らず、咽喉が鳴る。

「……やだ、知って……？」

彼女はさりげなく手首を振り解こうとしたが、拘束されたそれはびくともしなかった。

「わからないはずないでしょう？ ヒナギクさん、わかりやすいし」

彼は、さもおもしろそうにヒナギクに迫る。

「……じゃあ、私が怖がっているの知って、わざとあんな話題振ったのね？」

「もちろんですよ。怖いのに精一杯強がっているヒナギクさんはとってもかわいかったですよ」

ハヤテは壁にヒナギクを追い詰めると、愛しげに頬を撫でた。ヒナギクの肩が過敏に反応する。

「ハヤテくんのいじわる」

睨むけれども、ハヤテは楽しくてしようがないといった様子で彼女の唇を親指で撫でた。

ここまで彼のスイッチが入ってしまったえば、ヒナギクに逃れる術はない。

「だからお詫びに怖くないようにしてさしあげますよ」

「……んんーっ！」

ハヤテは自身のそれでヒナギクの唇を塞いだ。

完全に主導権を握ったまま、彼は何度も角度を変えては深くまで彼女を食った。

息苦しさに挙げられる抵抗をことごとく封じ、それでもなお、自身が満足するまで彼女を味わった。

抵抗が弱くなると、ハヤテはやっと彼女を解放した。

ヒナギクはただ、荒い呼吸を繰り返しながら、とろんとして、その場にへたりこんだ。

その口元には、だらしなく唾液の痕が残っている。

そんな彼女を見下ろして、ハヤテはにっこりと微笑んで助け起こすように彼女に手を差し出した。

「やだ……」

けれど彼の意図するところを瞬時に判断して、ヒナギクは座り込んだまま後退った。

けれどハヤテは有無を言わせず彼女の手首を掴んで引き寄せた。

見かけによらず強い力で、ヒナギクが抗ってもやはりびくともしない。

「テラスが嫌なのは高いからですか？幽霊が出るからですか？ヒナギクさんはどちらのほうが怖いんでしょうね」

「うっ……」

ヒナギクは涙目でハヤテを睨む。

けれど、こうなったハヤテはそのくらいでは怯んでくれない。彼女はなかばヤケになって暴露する。

「両方よ！両方！生徒会長でもなんでも、怖いものはしようがないじゃない！」

そっぽを向いたヒナギクの頭をハヤテが撫でる。

これではまるつきり子供扱いだ。

「大丈夫ですよ。僕に任せてください」

無敵スマイルで嫌がるヒナギクを無理やりテラスに連れ出すと、手すりに掴まらせた。

そして彼女の下着を抜き取ろうとしたハヤテは、しかしそこで動きを止めた。

「なんだ、ヒナギクさん、もうぐっしより濡れてるじゃないですか。僕にされるのを期待して濡らしちゃったんですか？」

ヒナギクの顔が真っ赤に染まる。

改めて意識すると、またじんわりと濡れた。

「ま、ヒナギクさんを開発したのは僕ですし、当然と言えば当然なんですけどね」

「……ちが……」

「これならこのまましても大丈夫そうですね。もうこんなにベタベタなんですから一緒です」

ハヤテは硬くなった性器を取り出すと、彼女の下着の布をよけてなんの準備もなく突如後ろから突き刺した。

「やあああああんっ！」

「く……っ」

狭い内壁を押しつけて侵入する。

敏感な部分を力任せに圧迫されて、ハヤテは息を呑んだ。

「す……。さすがですなヒナギクさん、一気に根元まで……。この調子ならどんなことしても平気そうですね」

彼は少女の細い腰を掴むと、勢いづけて性急に腰を打ち付けた。

白い脚が小刻みに震え、銀糸が伝い落ちる。

「あ……あ……あっ……」

ゴーン……ゴーン……

「……え……？」

ヒナギクは耳を疑った。この真上から聞こえる鐘の音。それはまさしく時計塔の誤報だった。

「あれ？鳴ってますね。ってことは幽霊が出るんでしょうか？」

ハヤテはたいして驚いた素振りを見せずに、ヒナギクの若い身体を堪能している。

けれど、彼女にとっては大問題なわけで……

「いや…」

彼女の身体を快感によるものとは別の震えが襲う。

恐怖のため彼女のつつましい秘部がきゅつと縮まったのを感じて、ハヤテはほくそえんだ。

ヒナギクは精神的に苛めているときのほうが、やはり感度がいい。

彼がそれを利用しないはずがない。

これ幸いと、ためらいなく彼女の恐怖を煽ってやる。

「今幽霊が現れたら、ヒナギクさんがしていること、ばっちり見られてしまいますね」

「や……」

またさらに縮まった。

そのくせ彼女の蜜壺からは絶えず蜜が溢れ、掻き出せばキレイな脚を汚した。

「僕に挿れられてよがっているヒナギクさんを見せ付けてあげましょうか。男を啜え込んだまま濡らしている恥ずかしい姿を」

「いやあああああつ！」

言葉で苛めればいちいちかわいい反応を返してくれる。

だからそんなヒナギクをたくさん見たくて、ついハヤテは彼女にいいわるをしてしまうのだ。

ヒナギクが嫌がって激しく首を左右に振る。彼女の美しい髪が流れる。

ハヤテを拘束する肉がひときわキツく縮まった。

ここぞとばかりに、彼はヒナギクのいちばん弱い最奥を、欲望のままいささか乱暴に突き上げた。

けれどヒナギクの身体はその衝撃にすら涙を流して悦ぶ。

彼女の身体は、完全にハヤテ好みに調教されていた。

「……つい……ハヤテく……、もつとつ……もつ……、ひつ、やあつ！」

彼女はひたすらよがり、嬌声を上げるだけで、すでにここがどこなのか、どうして自分がこうしているのか忘れてしまっているようだった。

ハヤテは挿挿のスピードを上げた。

ヒナギクの口からは、もはや淫らな喘ぎ声しか聞こえてこない。

彼女から溢れたものはぐちゅぐちゅと泡だつてニーソックスを汚した。

「ヒナギクさんっ……！」

彼女の突き当たりでハヤテが大きく脈動した。

「ひつ、あつ、やああああ——っ!!」

外聞もなく叫ぶと、秘部からハヤテの白濁液を溢れさせてヒナギクは果てた。

「……噂を流したの、あんたたちだったの？」

数日後。生徒会室にて例の三人娘を目の前にしたヒナギクはうなだれた。

不本意ながらハヤテのおかげでふつうに生徒会室に出入りできるようになった矢先のことである。

「そうよ。だって退屈だったんだもの」

悪びれもせず、美希は不思議そうに首を傾げた。

退屈な学校生活を楽しくして何が悪いのだろうと問いたげな顔をしている。

根本的に思考回路が自分とは違うのだろう。

ヒナギクは溜息をついて、今回のことは水に流そうと思った。

これで万事解決、無問題である。



しかし……

「だけどね、最近わたしたちが流した噂に尾ひれが付いているみたいなのよ」

空気がおかしくなつて、ヒナギクは身構えた。

「なによ、尾ひれつて？」

警戒して問いかける。

美希はむしろ楽しんでる口調で続けた。

噂話が一人歩きを始めたことが、よほど嬉しいらしい。

「わたしたちが流したのは、『深夜0時に時計塔の鐘が間違つて鳴ると、生徒会室のテラスに白い人影が現れる』つてところまでなんだけど、わたしが聞いたところでは、『その人影は悲鳴と嬌声を上げている』らしいのね。ヒナ、なにか知つてる？」

心当たりがありまくりなヒナギクは聞いた体勢のまま固まつた。

できることなら聞かなかったことにして、さっさと噂を消し去つてしまいたい。

「しら、ない、わよ」

「ふーん、そうなの」

ぎこちない笑顔で返すと、美希はそれ以上追及することはなかった。

その物分りのよさがむしろ怖い。

生徒会室に微妙な空気が流れると、今まで黙って何かを考えていたらしい理沙がポンと手を打った。

「これぞ『学校の猥談』つてね」

自分で言ったダジャレに彼女は満足げにニヤリとした。

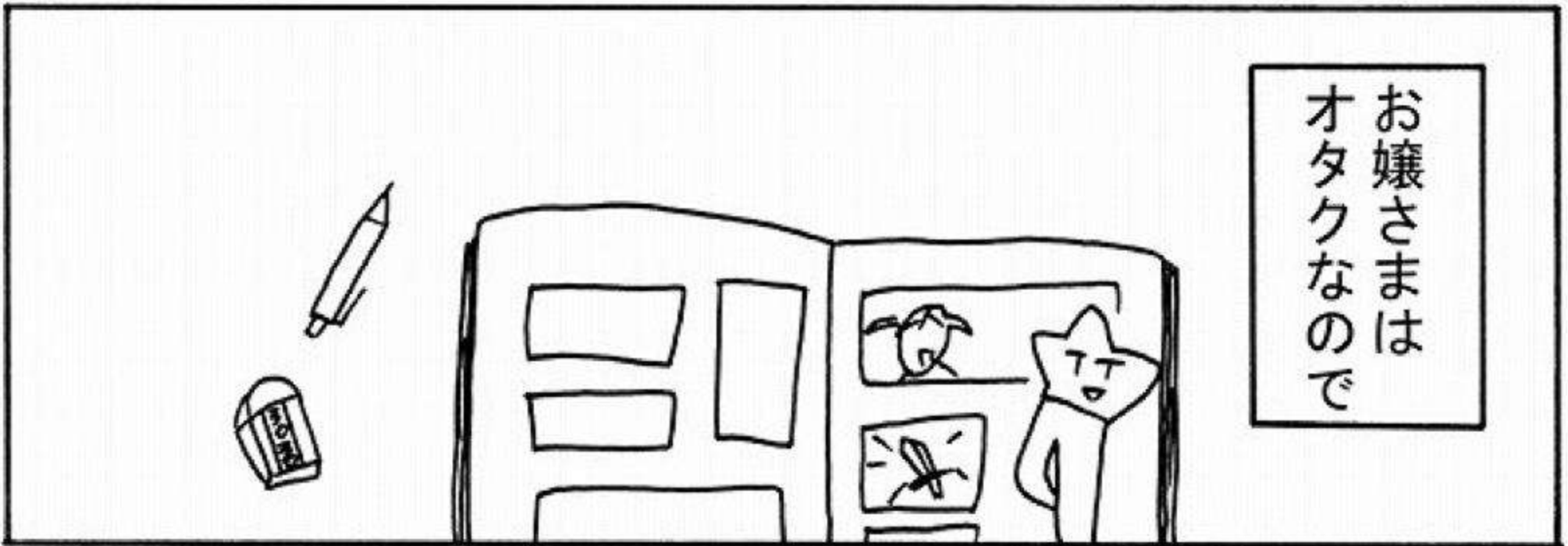
「わー理沙ちゃんおもしろー」

隣で泉も囁し立てる。

(ぜんぜんおもしろくないわよ——っ!!)

ヒナギクは叫びだしたいのをぐっと堪えて、ひたすら羞恥に耐えていた。

——終わり——

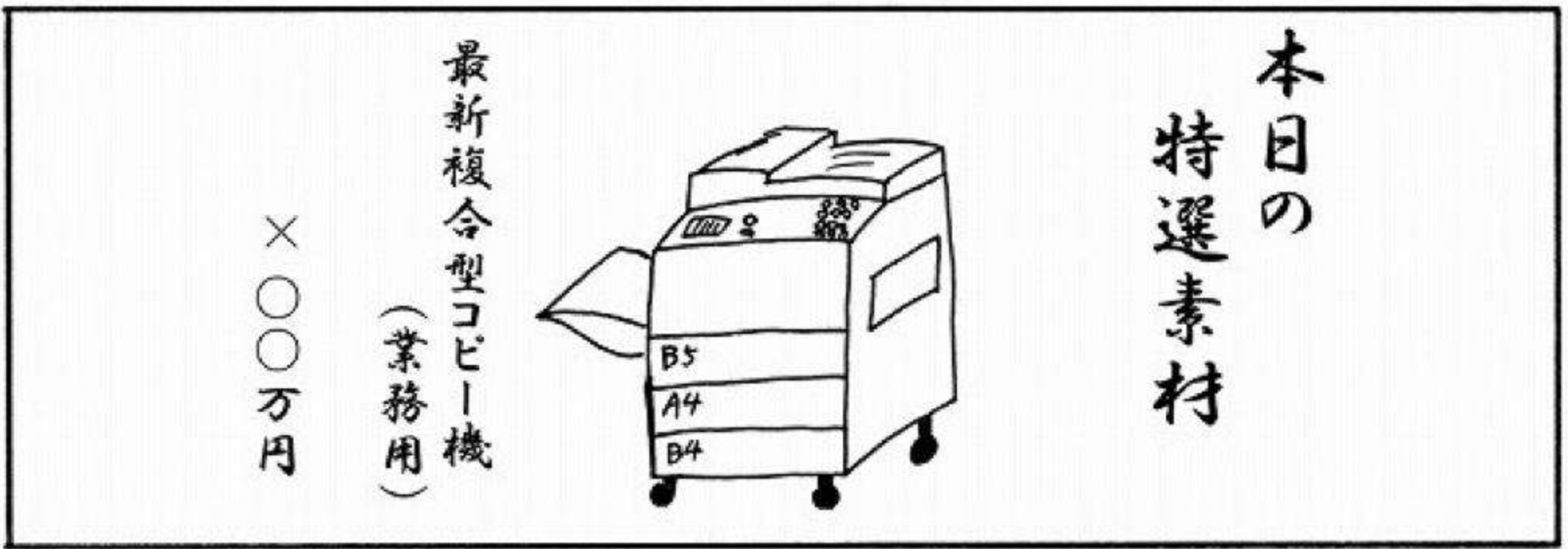


お嬢さまは
オタクなので



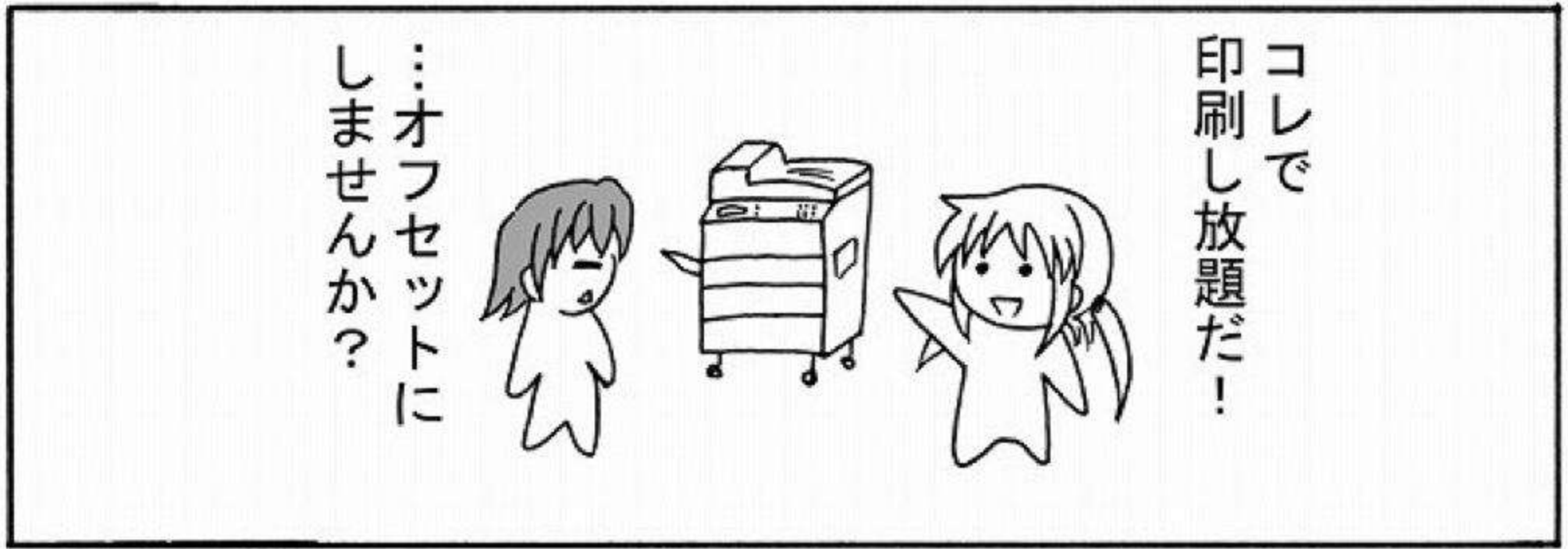
早速コピー本を
作るぞ！
マイ同志！

同人活動に
目覚めた！



本日の
特選素材

最新複合型コピー機
(業務用)
×○○○万円



これで
印刷し放題だ！

…オフセットに
しませんか？





